方法としての「ユートピア」

── 非理想理論の観点から ──

佐　野　　亘

はじめに

本稿の課題は、ユートピアについて、現代規範理論、なかでも非理想理論の観点から検討をくわえることである。むろんひとことでユートピアといっても、その範囲はあいまいである。トマス・モアの『ユートピア』から始まる、近代西洋における特殊なタイプの文学作品群を指すこともあれば、単に理想的な社会構想一般を指すこともある。じつのところ、そもそもユートピアとは何かをめぐっては、文学のみならず社会学や政治学などでも議論がなされており、ここでそうした議論のていねいな紹介や整理をおこなうことはできない。そこで本稿では、あえて厳密な定義をおこなうことはせず、さしあたり、理想的かつ具体的な社会構想（あるいはその言説やイメージ）を意味するものと捉えておきたい。したがって、文学作品に限らず、映画やアニメ、具体的な活動（コミュニティ形成など）も含まれるし、場合によっては宗教的なイメージ（天国など）も含まれる。他方で、具体的なイメージをもたない純粋に抽象的な理論や宗教教義といったものはいちおう除外しておきたい。

このようにユートピアを大まかに捉えたうえで、ではなぜそれを非理想理論の観点から検討するのだろうか。そもそも非理想理論とは何か。順をおって説明しよう。

まず、非理想理論とは、簡単にいうと、現実にはいますぐ完全な正義を実現できないとして、では、いまの時点で具体的に何をすべきか考えるための理論である。当然のことながら、仮に「完全に正義が実現した理想の社会」がありうるとしても、それがすぐさま実現される見込みは、少なくともいまのところ、ほとんどない。実際には正義を実現するには多くの資源やチャンス、すなわち条件がそろっている必要があるが、そうした条件がすべてそろうことは当面期待しがたいからである。ここで「そうした条件」として具体的に想定されているのは、たとえば一定以上の経済水準や教育水準などである。実際、発展途上国では、こうした条件がほとんどそろっておらず、その結果、正義にかなった適切な社会を実現することは非常に難しい、と考えられている。また同様に、先進国ですら、途上国にくらべればはるかに多くの資源を有し、めぐまれた条件を有しているにもかかわらず、多くの不正や悲惨が存在している。

ユートピアは、一見すると、こうした現実の条件を考慮することなく、純粋に理想の社会を描いたもののようである。じつのところ、ユートピアは、理想の社会を実現するための条件がじゅうぶんに存在しない状況のもと、あえて現実の厳しさに目を向けず「夢」を語ったものとして捉

えられることが多い。しかしながら、のちに詳しく述べるように、ユートピアのなかには（ユートピア的な作品や構想のなかには)、現実をまったく無視した単なる夢物語とは呼べないものがある。あるいは、もう少し踏み込んでいえば、単なる夢物語ではないものこそ、すぐれた作品や構想となっている。むろんそうした作品や構想も、すぐさま実現できない理想のビジョンであることは確かなのだが、他方で、ある点においては現実的な条件に配慮したものとなっているのである。

そこで本稿のねらいは、第一に、非理想理論の観点からユートピアについて考察することを通じて、非理想理論そのものの理解を深められる可能性を示すこと、第二に、もし可能であれば、従来のユートピア研究に対してもなんらかの貢献をおこなうことである。以下では、ユートピアとは何か、また、これまでユートピアをめぐってどのような議論がなされてきたのかを簡単に振り返ったうえで、ユートピア的な作品や構想、あるいはそれをめぐる議論について、規範理論の観点からどのような意義を見いだせるか論じたい。そのうえで従来のユートピア論に欠けていた点もあわせて指摘できればと考えている。

１．そもそもユートピアとは何か

先に述べたとおり、ユートピアをめぐってはすでに膨大な議論がなされており、ここでそのすべてを紹介することはできない。また正直なところ、関連するあらゆる文献を網羅的にレビューすることも不可能である。それゆえ以下の紹介は、短い時間のなかで目に触れたものにもとづく、ごく限定的な議論の整理にとどまる。特に、文学的な評価や文学史をめぐる議論についてはあまり触れることができない。どちらかといえば、政治思想や社会思想の分野で論じられてきたことを中心に、必要に応じて、文学作品やサブカルチャーに関する議論にも触れながら、これまでの議論の整理・紹介をおこないたい。

多くの場合、ユートピアをめぐる議論はモアの『ユートピア』の紹介から始められる。その歴史的背景や内容を紹介しつつ、後世に与えた影響が論じられるわけである。だが、ここではそうした歴史的な流れや具体的な内容を追うのではなく、そもそもユートピアとは何かについて、これまでどのような議論がなされてきたのか振り返ることから始めたい。

これまでしばしば、ユートピアは西洋に特有のものか否かをめぐって議論がなされてきた。一部の論者は、モアの作品に示されるように、ルネサンス期における自由や解放への憧れ、あるいは知への信頼といったものがユートピアを特徴づけると論じている。また、こうした論者のなかには、モア以降に数多くうみだされたユートピア的文学作品や哲学的構想、たとえばフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』やシャルル・フーリエらの「空想的社会主義」などに、科学主義的な発想にもとづく共産主義の源を見いだすものも少なくない。さらにまた、別の論者たちは、こうした意味でのユートピア的な構想はすでにプラトンの議論に見いだせると指摘し、20 世紀の計画主義的全体主義はまさにその全面的な実現であると主張している。

ここではこうした指摘の妥当性については直接論じないが、少なくとも本稿では、ユートピアは西洋特有のものではないし、社会主義や共産主義に必然的に結びつくものでもない、と考えておくことにしたい。というのも、西洋に限らず、理想の社会を構想するという発想は世界中どこにでも存在するうえ、特に近年のサブカルチャーに顕著に見られるように、決して社会主義や共産主義のようなユートピア像ばかりが描かれてきたわけではないからである。たとえば、サブカルチャーの領域では、特にアメリカにおいて、リバタリアン SF と呼ばれる作品群が存在し、ある種のユートピアが盛んに描かれ、一定の支持を得ている。また、近年のグローバル市場主義の称揚について、グレイは、キリスト教の「千年王国」論につながるようなユートピア的発想にもとづく主張であると指摘している（グレイ 2011）[1)]。むろん、総じて、西洋のユートピア作品や構想のほうがより具体的かつ詳細である。また、西洋では、他の地域にくらべて、宗教と切り離されたかたちで理想の社会が描かれるようになるのが比較的はやかった、といえるかもしれない。また、特にモア以降、ヨーロッパにおいて 19 世紀までに書かれた膨大なユートピア的作品群の多くは、財産の共有や身分・階級の廃止に特徴づけられており、大まかには、共産主義的な直観に支えられていたといえなくもない。とはいうものの、特に西洋特有のものとして、あるいは共産主義的なものとしてのみ、ユートピアを捉える必要はないと考えられる。

したがって、第二に、本稿では近代以前の構想や言説、フィクションやイメージもユートピアから排除せず、場合によっては宗教的なものも含むものとして捉えておきたい。一般には、宗教的な信仰にもとづく究極の理想社会といったものは、ユートピアには含めないとされることが多い（クマー1993）。たしかに、死者がよみがえり、神に認められた者だけが永遠の生を享受する社会を、いわゆる「ユートピア」と捉えるのは不適切かもしれない。また同様に、仏教における涅槃や悟りといったものもユートピアとは呼びにくいだろう。こうした理想はあくまで「彼岸」の存在として捉えられているのに対し、ユートピアはいくら非現実的であるとはいえ、あくまで「此岸」のものと考えられているからである。ただ、こうした指摘はもっともであるものの、こうした宗教的な「彼岸」のビジョンも、歴史的には「此岸」のユートピアとして受け止められることが少なくなかったことに注意する必要がある。じつのところ、「神の国はすでに存在する」とか「天国はいままさに実現しようとしている」という主張や考えは（しばしば異端派によって）繰り返し説かれてきたのである（太平天国の乱など）。また、彼岸の理想であっても、特にその記述が具体的になればなるほど、此岸のユートピア構想に大きなインスピレーションを与えてきたことは間違いないだろう。

第三に、当然のことではあるが、ユートピアは基本的に公的なものであって、私的な夢のようなものではない。たとえば、あるひとが自分以外のだれもが自分のいうことを聞く社会を夢見ているとして、そのような社会はその本人にとっては理想の社会かもしれないが、本稿ではこれをユートピアとは呼ばないことにしたい。もちろん、ある理想の社会を語る際、こっそりみずからの私的願望を忍び込ませることはめずらしくない。だが、それはあくまで背後に隠された願望ないし動機にとどまり、ユートピアは少なくともタテマエとしては、すべてのひとにとっての普遍

的な理想として提示される必要がある。しばしば、たとえば自分の好きなものに囲まれた生活（動物が好きなので動物園のようなところに暮らしたいというような）も、そのひとにとってのユートピアであるといわれることがあるが、ここではいちおうそうしたものは除外しておきたい[2)]。したがって、本稿におけるユートピアは宗教的な背景があるものも含めて、あくまで一種の社会思想ないしは政治思想として捉えられるものである。

２．ユートピアについて語る意義

では、なぜこうした意味でのユートピアについていまあらためて取り上げる必要があるのだろうか。よく知られているとおり、特に20世紀に入ると、ユートピア的な理想を語ったり掲げたりすること（さらにはそれを実現しようとすること）の危険が繰り返し語られるようになった。

その理由は、第一に、多くの場合、ユートピア的な理想社会の構想は人為的かつ知的な社会の設計と結びつくものと捉えられてきたことがある。ユートピアを語ることは、結果的に、だれにとっても理想の社会（とされるもの）を、科学者や哲学者のような賢人が設計し、それを一般の人びとに対して上から強制的に押し付けることになりやすい、というわけである。よく知られているとおり、ポパーがプラトンを全体主義の始祖と位置づけ、非難したことの背景にはこのような危惧が存在していた（ポパー1980）。同様に、バーリンは、人びとの考え方や利害、価値観が多様化した近代社会において、唯一正しいユートピアが存在することを前提にした言説は、狂信的な政治運動を引き起こし、その結果、ナチズムとスターリニズムという、20世紀のふたつの「悲惨」を招くことになったと主張した。ユートピアについて語ることそれ自体が、自由と多元性を奪うもっとも危険な行為にほかならない、というわけである（バーリン 1984）。

第二に、ユートピアについて語ることは、目の前にある具体的な問題をひとつひとつ地道に解決していくような実践的な態度を損なうものであるという批判もある。たとえば、ヒースとポターは、既存の社会とそれを支える文化の総体を批判するカウンターカルチャー的な政治主張（ヒッピー文化など）が、実際には消費文化に取り込まれてしまったうえに、具体的な問題に対する具体的な取組みを軽視させてしまったと批判する（ヒース＆ポター2014）。だれもが「フリーセックスとドラッグ」を気軽に享受し、「長髪にジーンズ」を身に着けるような社会になれば、拝金主義や性差別といったさまざまな社会的抑圧が消滅し、「愛と平和」が実現するといった言説は、一種のユートピア的なビジョンとして流通したし、こうした発想はいまなお根強く存在する。ヒースらによれば、このような「ラディカルな批判」は、結局は奇抜なファッションや趣味を促進するものにしかならず、実際的な問題解決には一切寄与しない。そのうえ、文化を含めて社会そのものを根本的に変革しなければならないとするユートピア的な発想は、目の前にある具体的な問題の解決を軽視させ、現実から遊離した不毛なイデオロギー論争に陥りがちである、というのである。

こうしたことから、特に20世紀にはいると、「ユートピア以後（ポスト・ユートピア）」につ

いて盛んに語られるようになるとともに（e.g. シュクラール 1967）、もし仮に実際にユートピアが実現されたとしても、それは結局、ディストピアになるのではないかという批判もなされるようになる。そして、20 世紀前半に数多く書かれたディストピア小説はまさにそうした発想にもとづくものとされる。ちなみに、イデオロギーの終焉が説かれ、プラグマティックな政策論争の必要性が唱えられるようになったのは、こうした状況においてであった。

確かに、こうした批判はいずれも部分的には、あるいは、ある特定のタイプのユートピアには、まったく正当なものである。だが、その一方で、あらゆるタイプのユートピア的構想を否定するとまではいえないように思われる。たとえば、ジェイコビーは、ユートピア的作品を執筆したり、ユートピア的構想を提示したりした者のなかには、積極的に実際的・具体的な社会改善に取り組んだ者もいると指摘する。また、多くのディストピア小説は、ユートピアを批判することが真の狙いではなく、じつは現状の社会に対する批判として、すなわち現状の社会をグロテスクに誇張して描いたものとして、書かれたと指摘している（Jacoby 2007）。

また以下に示すように、実際には、20 世紀なかば以降、いまこそユートピアについて語ることが重要であるということも同時にずっといわれ続けてきた。一般的には、ユートピアを構想したり、ユートピアについて語ったりすることの意義については、以下のような議論がなされてきたといえるだろう。

第一に、「ユートピア的想像力」が存在しない限り、自分たちが住んでいる社会のあり方を相対化する視点が得られないと考えられる。ユートピアを否定することがすなわち理想を語ることの拒否を意味するとすれば、わたしたちに残されているのは現状肯定かあるいは単なる絶望であり、不幸や悲惨はやむを得ないものとして甘受されるか、あるいは自分自身の責任（自己責任）として処理されるほかない。とはいえ、もちろん、あえてユートピアを持ち出さなくとも現状を批判することも不可能ではないかもしれない。たとえば、シュクラーなどが主張するように、実現できるかどうかはっきりしないユートピアについて語るよりも、いますでに実際に存在する、だれもが見過ごすことのできない理不尽な苦痛や残虐を減らすことこそが重要である、という議論も確かに可能であると思われる（シュクラール 1967）。ただ、とはいえ、こうしたシュクラーのような態度ないし戦略の意義を否定する必要はないとしても、同時に、以下に述べるようにそれだけでは「足りない」からこそユートピアが求められているように思われる。

すなわち、第二に、積極的に理想の社会を語らないことは、結局のところ、その場しのぎの「場当たり主義」を正当化することになりかねない、ということである。個別の悲惨に個別に対処すること、個々の問題を地道に解決していくこと、それらはいずれも意義のある尊い試みであるとはいえ、そうした個々の努力や取組みが全体としてどのような社会をもたらすかわからないとすれば、いつまでもわたしたちはある種の不安と不全感のなかで生き続けることを余儀なくされるだろう。しばしば指摘されるように、われわれが希望をもって生きられるのは、なんらかの将来の見通しがあるからこそである。ユートピアについて語ることを避けることが結局のところ「そもそも論」を回避することにつながっているとすれば、それは不必要な視野の狭隘化である

ように思われる。また、あらためていうまでもなく、部分最適は必ずしも全体最適を実現するわけではない。

ちなみに、ジェイムソンは「ユートピア的衝動」と「ユートピア的構想」を区別し、前者は日常のあらゆる場面に存在するものの、それらは断片的なものにとどまり、多くの場合、資本主義を支える「商品の魅惑のイメージ」へと吸収されていくものであると指摘している（たとえばテレビ CM のなかの清涼飲料水を飲む若者たち）。それに対して、ユートピア的構想は、次に述べるような全体性を備えたものとして評価しうるとされる（ジェイムソン 2011）。

つまり、第三に、ユートピアは、システム論的な意味で「全体構想」にほかならず、個別のサブシステムだけに注目するのではなく、さまざまな個別要因がどのように相互に関連しているかを明らかにする試みとしても捉えられる。これまで描かれてきた多くのユートピアは、狭義の政治や経済のあり方にとどまらず、家庭やコミュニティのあり方、働き方や余暇の過ごし方、また人びとの性格特性や行動特性、さらにときには、服装や食事など、ひろい意味で文化に関わるものを含んでいる。じつはこのことがまさにユートピアが全体主義を招く恐れがあるとされた理由のひとつにほかならないが、視点を変えれば、政治や経済のシステムが適切に機能するうえでどのような条件が必要かを示唆するものとしても捉えられる。たとえば西洋では、プラトンやアリストテレスから始まり、モンテスキューやトクヴィルに至るまで、理想の社会はつねに政治、経済、家庭、余暇、宗教、仕事、文化、気候などが相互に複雑に関連しあったものとして論じられてきた。じつは、自然法思想に依拠する社会契約論や近代的な規範理論の多くは、こうした複合的な要因をあえて捨象し、公私を厳格に分離し、政治や経済の領域をせまく限定することで普遍的な理想を語るものであった。その結果、汎用性の高い洗練された理論がうみだされることになったものの、そのかわりに「全体性」を失ってしまったということもできる。マンフォードも指摘するように、ユートピアはまさに、こうした近代的な「せまい」議論を超えて、複合的な全体性に着目する議論の伝統を引き継ぐものであるといえる（マンフォード 1997）。

第四に、この点にも関連して、ユートピアが具体的な「かたち」をとっていることが重要である。のちにも述べるが、現在、特に規範理論研究の分野では、正義、さらには社会のあり方の良し悪しについて、抽象的・理論的なレベルで論じられることが多く、そうした議論の多くは必ずしも具体的なイメージをともなわなくなっている。たとえば、ロールズにせよセンにせよ、彼らが理想と考える正義が実現したとして、ではその結果どのような社会が実現するのかは、彼らの書いた論文や書物を読んでも、必ずしも具体的なイメージが湧かない。どうやら、生まれつきの理不尽な格差はなくなっているらしい、とか、各人の有する可能性は最大限に尊重されるらしい、ということはわかっても、それが具体的にどのような社会においてであるのかは、もうひとつはっきりしないのである。それはたとえば北欧諸国のようなものなのか、あるいはもっと活気のあるダイナミックな社会であるのかもよくわからない。この点、ユートピア的な構想や作品は基本的に（というか定義上）具体的なイメージをともなっている。やや誇張していえば、そうした社会がどのような理念や価値にもとづいて成立しているかわからなくても、多くのひとは、そう

した具体的イメージに接すれば、そのような社会に実際に住んでみたい、とか、そんな社会がほんとに実現したらいいのに、ということは判断できるのである。少なくとも良質なユートピア構想であれば、多くのひとは、それが空想的なものであることは理解しつつ、リアリティをもって受け止めることができるし、魅力の有無を即座に判断できるものである。やや奇妙なたとえかもしれないが、尊敬できる人物について、抽象的な一般論で語られてもピンとこないが、具体名をいわれればそれがどういう人物であるかすぐに「わかる」はずである。たとえば、「だれにでも親切で勇気があるうえに頭がよくコミュニケーション能力も高い」といわれても、確かに尊敬に値することは理解できても、たとえば自分自身がそういう人物になりたいかと聞かれても、答えに困るかもしれない。だが、勝海舟でも西郷隆盛でもいいが（もちろんフィクション作品の登場人物でも構わない）、具体的な人物名を挙げられれば、多くのひとは、そういうひとに憧れる、とか、自分はそうはなりたくない、とか答えることができるだろう。すぐれたユートピア作品や構想も、こうした魅力的な具体性をともなっており、だからこそ多くのひとがそれに惹かれたり、反発したりすることができる。逆にいえば、現在の規範理論はある意味で「純粋理論」であるがゆえに、そうした魅力を失っている、とも考えられる。

3．理論的検討

以上、ユートピアをめぐって、どのような議論がなされてきたのかについて、ごく簡単な紹介をおこなった。むろんユートピアに関しては他にも多くの論点が存在するうえ、思想史的な検討もさまざまにおこなわれている。だが、ここでは紙幅の都合もあるため、従来の議論の紹介はこの程度にとどめ、規範理論の観点からどのような議論が可能であるのか、さらに検討してみたい。

かつてリクールは、マンハイムの議論に依拠しつつ（マンハイム 1968）、現実から「距離」をとった言説やイメージには、イデオロギーとユートピアという二つのタイプがあること、そして、前者はつまるところ自己確認ないし自己正当化のためのものであり、抑圧や歪みをもたらすものである一方で、後者はむしろ現実から離脱し、「ここではないどこか」に向かって、すなわち、当たり前のものとして受け止められやすい「いまここ」から、まさに空想の力によって抜け出ていく力として存在することを指摘した（リクール 2011）。このような指摘はまた三木清による構想力の議論にも通じるものであるだろう（三木 2001）。

ただ、その一方で彼らの議論はあまりにも哲学的・抽象的であり、上に見たようなユートピアの魅力と意義をじゅうぶんに捉えきれていないように感じられる。現実への違和感と、そこから生じてくる想像・創造による飛躍の力に期待することそれ自体はごく正当なことと思われるが、それを指摘するだけでは、いまわたしたちが抱えている課題にこたえることはできないように思われる。そもそも、上に述べてきたことから明らかなとおり、本稿では、ユートピアは、全体性と具体性に特徴づけられた理想的な社会構想として位置づけられる。本稿では、特にこの具体性に着目し、ユートピア的作品や構想から、わたしたちは何を学ぶことができるのか、さらに検討

してみたい。

そこで、最初に断っておく必要があるのは、そもそも何をもってユートピアとするかはじつは、受け止め方しだいである、ということである。たしかに、はじめからユートピアとして構想・執筆された作品も少なくないが、実際には、もともとはユートピアとして描かれたわけではない作品が、結果的に、ユートピアとして受け止められ解釈される、ということがある。とりわけサブカルチャーにおいてはそうした作品が多く、たとえば、かつてハリウッドで盛んに作成された西部劇映画は、現在のアメリカのリバタリアンには、ある種のユートピアを描くものとして受け止められることがある（政府が存在せず、すべて自分たちで決着をつける社会として）。あるいは、日本の一部のひとには、時代劇（水戸黄門など）で描かれている「江戸のまち」が一種のユートピア的理想社会として捉えられているかもしれない。あるいは安倍首相が映画『Always　三丁目の夕日』を高く評価していたという話があるが、これも本人のなかでは一種のユートピア（貧しくともみな親切で家族の絆を大切にする社会）と考えられていた可能性がある。同様に、これもよく指摘されるように、自分たちとはまったく異なる文化を有した社会、たとえばいわゆる「未開社会」がユートピアとしてイメージされることも少なくない（ルソーにとってのネイティブ・アメリカンのように）。

いうまでもなく、西部劇で描かれた19世紀のアメリカにせよ、多くの時代劇で描かれる江戸のまちにせよ（もちろん「古きよき日本」にせよ「未開社会」にせよ）、たぶんに美化されたもの（というよりほとんど荒唐無稽な空想に近いもの）に過ぎず、現実を正確に描写したものではない。それらの作品やイメージを受け止める側は、それが虚構であることを認識していることもあれば、そうでないこともあるが、いずれにせよここでのポイントは、そうしたイメージが、自分自身がいままさに生きる社会とは異なる、理想のものとして捉えられていること、また、それが具体的な細部を有した全体像として提示されている（と捉えられている）ことである。この点に注目するならば、いわゆるユートピア作品と、西部劇や時代劇のようなものを特に区別して扱う必要はないことになるだろう。

このように理解したうえで、では、そうしたユートピア的な理想のイメージを単に娯楽として消費するのではなく（またイデオロギーとして機能させるのではなく）、規範理論の観点からその意義を見いだそうとすれば、どのような点に注目すればよいだろうか。

第一に、先に述べたとおり、ユートピア的作品や構想の特徴はその全体性と具体性にあり、すぐれたものほど数多くの要素が複雑に組み合わされているが、そこでどのような要素が重要なものとして取り上げられているのか、また、それら複数の要素が相互にどのような関係にあるかに着目することで、構想されている社会がどのような条件のもとで成立すると考えられているのか理解される。先に触れたとおり、実際には、多くのユートピアは、単なる夢物語ではなく、重要な点において現実的な条件を織り込んでいる。たとえば、ある理想の社会は非常に豊かで、ほとんどのひとは働く必要がないが、ただしそうした社会を支えているのは、高度な科学技術と、それを実質的に担っているごく少数のエリート科学技術者集団である、といったビジョンが提示さ

れた場合、そこでは「豊かさや苦役からの自由」という価値を実現するために、「高度な科学技術とそれを支えるエリート集団」という社会条件が必要と考えられているということである。また、さらにいえば、こうした社会体制を批判するひとは現れないのか、現れないとすればそれはどのような条件によるのか（幼少期からの教育によるのか、あるいはだれもが自然にそのような体制を受け入れているのか）も説明されることになるだろう。もちろん、実際の作品においては、より多くの条件が相互に複雑に関係しあっているが、いずれにせよ、規範理論研究の観点からは、いかなる価値を実現するために、どのような条件（社会経済条件だけでなく文化的条件や道徳的条件、さらに場合によっては生物学的条件や自然条件）が必要とされているかに着目することが重要である。先に非理想理論の説明のところでも触れたように、正義を実現するためには一定の条件を満たす必要があるはずだが、どのような価値を実現するためにどのような条件が必要であるか、については、じつはじゅうぶんな議論がおこなわれてきたわけではない。せいぜいのところ、経済的豊かさや教育、ときにモラルや徳、国民性や文化といったものが挙げられてきた程度である。だが、実際には、より複雑なメカニズムのもと、多くの要因が複雑に絡み合うことによってはじめて正義を実現するための条件が整うのかもしれない。すぐれたユートピア作品や構想であるほど、思いがけない要素や要素間の組み合わせが重視されている可能性が高く、わたしたちはまず、そこから多くのヒントを手に入れられる可能性がある。

また、この点に関連して、ユートピア的な作品や構想は、いわば「実現可能性と不可能性の組み合わせ」のさまざまなパターンを示したものとしても捉えられる。理想の社会を構想するにあたっては、何を実現可能とし、何を不可能とするかを決めなければならず、その判断にも注目する必要がある。たとえば、よく知られているとおり、プラトンの理想の政体においては、詩人は存在していけないことになっているが、その理由は、詩が人びとを惑わせ、正確に物事を認識できなくさせてしまうから、ということであった。いい換えれば、プラトンは、詩人がいても、人々が正確に物事を認識するような社会を実現することは不可能だと判断した、ということである。むろん、このような判断が正しいかどうかは別途論じる必要があるが、いずれにせよ、ここで興味深いのは、ユートピアにおいてすら「不可能なこと」が存在する、ということである。これはおそらく、すぐれたユートピアと単なる夢物語との違いを示すポイントであるだろう。つまり、ユートピアは、あらゆる「好ましいこと」が実現したものとして捉えられがちだが、じつは決してそうではなく、とくにすぐれた作品や構想ほど「実現できないもの」を織り込んでいる。そして、ここで重要な点は、これは価値判断の問題ではなく、人間や人間社会をどのようなものとして見ているのか、という事実認識の問題に関わっていることである。たとえば、ユートピアにおいてすら人間性の根幹に関わる部分は変更できないと考えるのか、あるいは、教育や技術によって人間性そのものを変えてしまうことができると考えるのかで、どのようなユートピアが構想されるかは、まったく違ってくるだろう。じつのところ、ほんとうにあらゆることが可能なのであれば、多くのユートピア作品や構想が苦労して描いてきた、さまざまな細部はほとんど必要なくなってしまう。非常に豊かであるうえに、だれもが親切で互いに仲が良く、困ったひとがあ

れば助け合い、犯罪も戦争もない社会、というのは、ある種の理想ではあるかもしれないが、これではユートピア作品にはならない、少なくともすぐれた作品にはならないのである。

もちろん、何が実現可能で、何が実現可能でないかは、容易に答えを出せない問題である。たとえば、「国内のみならずグローバルなレベルでも完全な正義が実現し、いかなる不公平や権利侵害も存在せず、許容できないような格差も存在しないうえに、困っているひとがいれば互いに積極的に助け合う平和な世界」と、「医療技術が飛躍的に進歩し、ほとんどのひとは300歳くらいまで元気で健康に生きることができ、しかも、だれも働く必要がなく、いくらでも食べたいものを食べられるような世界」の、いずれがより実現可能性が高いか、と聞かれれば、判断はわかれるだろう（意外に後者を選ぶひとのほうが多いかもしれない）。ほぼすべてのユートピアは、こうしたさまざまな要素のうち、どこまでが実現可能で、どこからが不可能かの線引きをおこなっている。それゆえ、個々のユートピア作品や構想について考える際には、何が実現されているか、ではなく、むしろ何が実現できないとされているかに注意する必要がある。そこにこそ、その構想のもっとも基本的な視点が隠されていることがあるからである。

第二に、ユートピア的作品や構想は、以上のような事実に関わる問題とは異なり、諸価値のトレード・オフやジレンマ、優先順位づけのさまざまなパターンを示すものとしても理解できる。じつのところ、たとえば、だれもが他人に親切で、政府が存在せずとも病気や障害や貧困によって困るひとは存在しない、という社会イメージだけでは、わたしたちはどこか物足りない印象を受ける。こうした社会が存在する背景には、じつは、たとえば、うめる子どもの数が厳しく制限されている、とか、外国からの移住が厳しく制限されている、などの条件が存在するのかもしれない。これは、上に見たようにある特定の価値を実現しようとすると、ある事実的な条件が必要である可能性を示すと同時に、異なった複数の価値のあいだでのトレード・オフが不可避であることを示している。すなわち、ユートピアといえども、それがより「真に迫った」ものであろうとすればするほど、「何かを得るためには何かを犠牲にせざるを得ない」ということである。

たとえば、経済的な豊かさは、貧しさに起因する紛争や衝突、トレード・オフやジレンマを解消するかもしれないが、他方で、そうした物質的な豊かさを支えるために何かを犠牲にしているのかもしれない。あるいは、物質的な豊かさでは解消することのできない価値や欲望の衝突やジレンマが強く浮かび上がってくるかもしれない。わたしたちがときにユートピア的作品に接して抱く違和感や疑問の多くは、ほんとうにこんなに簡単に「調和」が実現できるのだろうか、ということである。わたしたちの多くは、直観的に、たとえば物質的条件がいくら改善したところで、簡単に理想の社会は訪れない、と感じている。それは、多くのユートピア批判論者が指摘したとおり、人びとの欲望や利害や価値観は多様であり、その衝突は容易に解消されない（あるいは解消すべきでない）、と感じているからだろう。にもかかわらず、わたしたちがユートピアについて語ったり、ユートピア的作品からなにかを学んだりすることができるとすれば、それは、そうした衝突やジレンマに対して、どのような優先順位づけやバランスが好ましいと感じているかを確認し、より多くのひとが納得できるバランスのとり方を、抽象的な理論のレベルではなく具体

的な社会の仕組みとして探るためのヒントを手に入れられるからではないだろうか。じつのところ、具体的作品や構想のなかには、思いがけない、たくみなバランスの取り方や調整方法が示されている可能性がある。規範理論のひとつの方法論として、さまざまな仮想事例を用いることで、自分たちが何を重要な価値としているかを明らかにするとともに、より整合的な理論を導き出す、というものがあるが、ユートピアの構想は、じつは、こうした方法とは異なる、新たな規範理論の方法論の可能性を示していると考えられる。

第三に、そのうえで、わたしたちは、ユートピア的作品や構想に、人びとのどのような欲望が反映されているかを見ることもできる。なお、ここで欲望とは、食欲や性欲のような生物的欲望のみならず、文化や道徳に関わる欲望も含まれている。たとえば、多くの人びとは、実際にそのように行動できているかどうかは別として、できれば他人に親切にしたいと思っているし、できるだけフェアに振る舞いたいと考えている。あるいは、「してはいけないこと」はしたくないと考えている。一般に、これは欲望を抑制する道徳や規範の問題として捉えられているが、じつはこうした道徳や規範もある種の欲望によって支えられたものとして理解することができる。ここで詳しく論じることはできないが、近年、道徳心理学などによって、人間が共通して有する道徳的感情が存在することが明らかとなりつつある（ハイト 2014）。その基盤となっているものが、生物学的・遺伝的なものであるのか、あるいは文化的なものであるかは別として、そうした道徳的感情も人間の欲望に深く根ざしたものである可能性がある。

したがって、わたしたちは、ユートピア的作品や構想に接する際、そこでさまざまな欲望がどのように表出されているのか、また、それら複数の欲望はどのように折り合いが付けられているのか（あるいはいないのか）、さらに、いかなる欲望の実現が断念されているのか、という観点から分析をおこなうこともできよう。たとえば、ハイトによれば、わたしたちの道徳感情は、味覚が５つの要素からなっているように、６つの基本要素からなると指摘しているが（ケア、自由、公正、忠誠、権威、神聖）、それらがある作品や構想においてどのように組み合わされているのかに注目することもできるだろう。むろん分析の際には、こうした道徳的感情に関わる欲望だけでなく、他のさまざまな欲望も対象に含めることができる。このように、諸々の欲望の衝突や組み合わせ、あるいはそれらの複雑な調整として分析することは、むろんユートピア作品以外に対しても可能だが、ポイントは、ユートピア作品においては、こうしたさまざまな欲望の「理想の組み合わせ」が提示されている点にある。それは、異なった種類の欲望間の関係と、異なった主体の欲望間の関係の調整・調和として描かれるはずである。

通常、正義や規範の問題は論理的な整合性の観点からのみ議論されるが、実際にそれを実現しようとすれば、人びとが現に抱いているさまざまな欲望とどのように折り合いを付けるのか（あるいは折り合いをつけることはせずに強制や教育によって対応するのか）、また異なった人びと同士の欲望の衝突をどのように処理するのかについて具体的に考える必要がある。規範理論の研究者のなかでも、特にリベラルな正義の観点を重視する論者は、正義にもとづくルール・制度さえ実現すれば、あとは自然に人びとの欲望は公平に調整されるし、そうしたルールに反しない限

りで自由にみずからの欲望の実現を追求できるので問題はない、と考えている。しかしながら、たとえばコミュニタリアンたちが批判してきたように（あるいは上述のハイトらも批判するように）、実際には多くの人びとは、仮にこうした社会が実現したとしても、それにはまったく飽き足らないかもしれない。たとえば、共同的な歴史意識の共有を求める欲望が存在し、しかもそうした欲望は容易に人びとのなかから消え去らないとすれば、リベラルな正義にもとづく社会が実現したとしても、その「行き場」を考えておく必要があるだろう。逆にいえば、こうしたさまざまな欲望の「行き場」をじゅうぶんに考えていないユートピアは、浅薄な構想であると判断されることになるだろう。

また、ユートピア的構想においてこそ、そもそもわたしたちはほんとうのところ何を望んでいるのか、あらためて深く考えることができるのかもしれない。たとえば、個人レベルで、ほんとうに大金持ちになりたいのかと聞かれれば多くの人は意外に「NO」と答えるのかもしれないのと同様に、たとえば、だれもが300歳まで生きられるうえに、ほとんど働く必要もない社会をほんとうに望んでいるかと聞かれれば、少なからずの人びとが「NO」と答えるかもしれない。ひとによっては、そのような社会よりもむしろ、それほど長生きできなくてもよいから、死ぬ寸前まで元気に働ける社会を望んでいるのかもしれない。わたしたちは、ユートピアに真摯に向かい合うことによってはじめて、みずからの真の欲望に気がつくことができるのかもしれない。

４．示　　唆

以上の検討から、どのような示唆を得ることができるだろうか。

第一に、さまざまなユートピア作品やユートピア的な構想を検討することにより、非理想理論の内容をより豊かで充実したものにすることができると期待できる。これまで非理想理論については、どちらかといえば理論的な検討のみがすすんでいて、具体的な内容についてはほとんど議論がなされていない。非理想理論においては、なにが理想の正義を実現するための条件になるかが重要になるため、非理想理論を提唱する論者はいずれも実証研究の重要性を指摘している。ところが、実際にそうした現実の条件を考慮して議論を展開している例は意外と少ない。そのうえ、膨大なユートピア作品群・構想群が示しているように、なにが正義の実現の条件になりうるかは、じつはさまざまな可能性がある。なにを実現可能／不可能とするかで、どのような正義を、どのようなかたちで、どこまで実現できるかがまったく違ってくるのである。そのうえ、そうしたさまざまな要因は相互に複雑に関係しあっている可能性が高い。なにがそうした複雑な条件であるのかについては、もちろん社会科学の知見にもとづいて検討をおこなうこともできるが、それだけでなく、ユートピア作品・構想からもヒントを得ることができる。というのも、やや誤解を招く表現だが、理想の社会の構想は、必ずしも現実の因果関係にとらわれることなくおこなわれるべき、ともいえるからである。じつのところ、多くの社会科学的な実証研究は、人々の行動パターンが安定した一定のものであることを前提としている。そうしなければ法則性が見いだせな

いからだが、当然のことながら、人々の行動パターンは将来変化する可能性もある。だとすると、過去や現在の事象から導き出された知見にもとづいてのみ実現可能性を判断すると、現状を変更することは難しいという結論に至りやすい。しかし、歴史を振り返って見るまでもなく、わたしたちの行動パターンは大きく変わりうる。ユートピア作品はまさにそうした創発的な変化を織り込んだ構想として捉えることができるだろう。このような観点からユートピアを捉えるならば、それは規範理論研究者にとっても「宝の山」であるといえる。

第二に、これはユートピア作品そのものというよりも、ユートピアをめぐる議論から得られる示唆かもしれないが、こうした議論を重ねることにより、規範理論と現実の関わりをあらためて整理し直すことが可能になると思われる。現在、政治学における規範理論研究の分野では、どの程度現実と距離をとるかをめぐって激しい議論がおこなわれている。そもそも正義を語ること自体を否定的に捉える「政治的リアリズム」と呼ばれる議論が存在する一方で、現実に配慮した理論は結果的に不当に現実に譲歩したものになりかねず、それゆえ現実に配慮しない純粋な正義を構想すべきとする議論まで存在する。こうした議論状況に対して、ユートピアをめぐる議論は、「現実か理想か」という二者択一的な議論をおこなうのではなく、理想と現実のあいだで、さまざまな線引きをしてみること、すなわち理想と現実のさまざまな混合パターンを想像してみることの重要性を指摘するものと捉えられるのではないだろうか。そもそもなにをもって理想とし、なにをもって現実とするかも、じつは議論の当事者それぞれが置かれている状況や立場、また現実を捉える視点や解釈枠組みに大きく左右されるものである。ユートピア作品およびそれをめぐる議論は、現実と理想のあいだの二者択一的な窮屈な枠組みに縛られている現代規範理論研究に対して、より豊かな議論の可能性を示すものと考えられる。

第三に、以上の点とも関連するが、ユートピア（作品）研究を規範理論研究のひとつの方法として位置づけうる可能性を指摘したい。これまでユートピアに関する研究は、文学研究の一環として、あるいは思想史的な研究として扱われ、規範理論研究そのものとしてはほとんど論じられてこなかったように思われる[3)]。しかしながら、以上の議論から明らかなとおり、ユートピアについて考察することにより、現在、規範理論研究において議論されている論点に対して理論的貢献をおこなうことができる可能性がある。本稿で論じてきた非理想理論をめぐる議論はそのひとつだが、そうした抽象的な論点に関してだけでなく、具体的な政策論争に関わるテーマについても、一定の貢献をおこなうことができるように思われる。たとえば、詳細な検討は別稿に譲らざるをえないが、グローバル化と市場化に対してどのような対抗戦略がたてられるのか、というような具体的・実際的なテーマについても、ユートピア作品やそれをめぐる議論から学べることは少なくないものと思われる[4)]。

最後に、以上のような規範理論の観点からの検討が、狭義の（特に文学的あるいは思想史的な）ユートピア研究に対して有する意義についても触れておきたい。いうまでもなく、ユートピア作品であれば、その文学的価値についての評価はそれ自体としてありうるし、そうした作品がどのような時代背景や作者の「ビジョン」からうまれてきたかを考察することにも大きな意義が

ある。このタイプの研究に独自の意義があることは当然だが、ただその一方で、文学作品としてすぐれたユートピア構想が、単に文学的な価値を有するだけでなく規範理論の観点からも大きな意義を有することはありうるし、しかも、規範理論上の意義と文学的な価値には内在的な連関があることもありえよう。こうした点からの作品の評価がありうることは、規範理論研究者はむろんのこと、文学研究者あるいは思想史研究者にも見逃されてきたように思われる。くわえて、規範理論の観点からの作品の分析が、文学作品としての評価の観点からも、見落とされてきた重要な点の発見につながる可能性もありうるように思われる。じつのところ、これまでにも、多くの作品がさまざまな理論的観点から分析されてきたが（たとえば精神分析や社会学の理論など）、規範理論の観点からの分析もあってよいのではないだろうか。

おわりに

以上、ユートピア的な作品・構想および、それをめぐる議論を、規範理論研究のなかに位置づけるための予備的な考察をおこなってきた。本格的な検討をおこなうには、さらに個別の作品や構想を取り上げ、具体的で緻密な分析をおこなう必要があるだろう。そういう意味では、本稿はあくまで予備的な位置づけにとどまる。今後は、特定の構想や作品を取り上げて詳細な検討をおこなうか、あるいは、特定のテーマや問題を取り上げ、それに関するさまざまなユートピア的作品や構想について分析をおこなう必要があるだろう。

ただその一方で本稿は、規範理論研究のひとつの方法、ないし分野として、ユートピア研究が位置づけられる可能性を示した点で、いちおうの意義を有するものと考えられる。規範理論研究においても、近年では、従来型の思想史的なアプローチにもとづく研究にくわえて、分析哲学的な手法を用いた研究も盛んになりつつある。これまでユートピア研究は基本的に前者の系列に属するものとして位置づけられてきたが、本稿の議論は、後者の系列に接続できる可能性を示したものであるといえよう。

注

1）ただし、グレイのいうように、あらゆるユートピア的発想をすべて、キリスト教の千年王国論に由来すると考えてよいかは、疑問が残る。興味深い指摘ではあるが、本稿では、すべてのユートピア構想がそのような背景をもつとは考えず、あくまで、さまざまに存在する背景のひとつとして捉えておくにとどめたい。ちなみに、澁澤は、セルヴィエの議論をひきつつ（セルヴィエ 1972）、（狭義の）ユートピア思想は基本的に母胎回帰願望に根ざした、安定した秩序への憧れにもとづくものである一方で、千年王国論はそうした退行的な「閉じこもり」を突き破るような現状破壊的な思想と運動であると主張し、両者は根本的に異なるものであると指摘している（澁澤 1986）。

2）なお、マンフォードは、こうした私的な夢の生活を「個人的なユートピア」と呼び、「逃避のユートピア」の系譜に位置づけている（マンフォード 1997）。

3）日本における数少ない（というかほぼ唯一の）例外として菊池の議論がある（菊池 2013）。本稿も多くの点で菊池の議論から示唆を得ている。また、社会学者であるレヴィタスも、社会学の１つの方法論として、ユートピアを捉えるべきだと主張している（Levitas 2013）。

4）ちなみに、菊池は、ソルニット（2010）の議論をひきつつ、コミュニタリアニズムとユートピアの内在的関連性を強調し、実践的な政策提言をおこなっている（菊池 2013）。

参考文献

菊池理夫（2013）『ユートピア学の再構築のために ──「リーマン・ショック」と「三・一一」を契機として』風行社

クマー，クリシャン（菊池理夫・有賀誠訳）（1993）『ユートピアニズム』昭和堂

グレイ，グレイ（松野弘訳）（2011）『ユートピア政治の終焉 ── グローバル・デモクラシーという神話』岩波書店

ジェイムソン，フレドリック（秦邦生訳）（2011）『未来の考古学　第一部　ユートピアという名の欲望』作品社

澁澤龍彦（1986）『黄金時代』河出書房新社

シュクラール，J. N.（奈良和重訳）（1967）『ユートピア以後 ── 政治思想の没落』紀伊國屋書店

セルヴィエ，ジャン（朝倉剛、篠田浩一郎訳）（1972）『ユートピアの歴史』筑摩書房

ソルニット，レベッカ（高月園子訳）（2010）『災害ユートピア ── なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』

ハイト，ジョナサン（髙橋洋訳）（2014）『社会はなぜ左と右にわかれるのか ── 対立を超えるための道徳心理学』紀伊國屋書店

バーリン（河合秀和訳）（1984）「西欧におけるユートピア思想の衰頽」、福田歓一・河合秀和編『バーリン選集３　ロマン主義と政治』岩波書店、所収。

ヒース，ジョセフ＆アンドルー・ポター（栗原百代訳）（2014）『反逆の神話 ── カウンターカルチャーはいかにして消費文化になったか』NTT 出版

ポパー，カール（内田詔夫・小河原誠訳）（1980）『開かれた社会とその敵　第１部プラトンの呪縛』未来社

マンハイム（鈴木二郎）（1968）『イデオロギーとユートピア』未来社

マンフォード（月森左知訳・関曠野解説）（1997）『ユートピアの思想史的省察』新評論

三木清（2001）『創造する構想力』燈影社

リクール，ポール（ジョージ・H・テイラー編、川崎惣一訳）（2011）『イデオロギーとユートピア』新曜社

Jacoby, Russell, 2007, *Picture Imperfect: Utopian Thought for an Anti-Utopian Age*, Columbia University Press.

Levitas, Ruth, 2013, *Utopia as Method: The Imaginary Reconstruction of Society*, Palgrave.